

鈴鹿に関わる戦跡・戦争体験聞き取り

学徒動員と格納庫群の思い出

山口俊彦さん(鈴鹿市若松中)

昭和19年の秋、16歳になったばかりの頃だったと思います。旧制神戸中学校3年生の時、15名ぐらいの仲間とともに学徒動員として四日市の軍需工場に駆り出されました。戦争が激しくなった4年生頃から南玉垣を中心にありました三菱重工業株式会社の航空機製作所鈴鹿整備工場へ転勤になりました。平田にあった鈴鹿海軍工廠へ行った仲間もいました。

工場へは毎日、自転車で通いました。周辺の風景が大きく変わったので断片しか思い出せませんが、現在の愛宕小学校の近くから打越を抜け、アピタ、ふれあいセンター、そして鈴鹿高専辺りを通って工場へ行ったことをかすかに覚えています。周辺には大きな軍需工場がありましたが、何を造っているのか分かりませんし、近くに近寄ることは禁止されておりましたから、随分遠回りをしていました。

当時、現在の鈴鹿医療科学大学千代崎キャンパス付近にあった三菱航空機製作所では主に零式戦闘機が組立てられ、完成後は千代崎中学校の辺りから幅40mの立派な誘導路を使用し、1,000m以上も離れた整備工場に運ばれておりました。私たちは工場内で腕章(人絹で作られ、学校名と学徒勤労働員とでも書かれていたのでしょうか)を巻いて、運ばれてきた戦闘機のネジやビスの締付の点検・確認とともに最後の取付けに必要な装備品や小道具の運搬といった補助作業を中心に手伝いました。燃料のガソリン注入作業にはホースの先端を「鹿」のなめし皮で覆い、ガソリンを濾過して手動ポンプで戦闘機のタンクへ入れたことを覚えています。(ちなみに、水であれば漏りもせず濾過はできません)

戦闘機の整備・点検が終わると、最終工程の試運転が行われます。エンジンを噴かすと機体の尾翼が浮き上がり、それを私たち10人ぐらいで帽子を飛ばされながら翼に腹這いになって押さえました。そして、合格するとテストパイロットを呼びます。パイロットは飛行服を着用して颯爽と現われ、皆の憧れの的でした。地上テストの後、格納庫の横を通って滑走路へ向かいます。飛行場は旭が丘小学校から白子中学校、そして白子高校の手前まで、1,000mにも及ぶ広大なもので、その中に滑走路がありました。パイロットのテストには20～30分間のテストコースがありました。上空から調子が良ければ、機体の翼を上下に振り地上へ合図し、その後、更に高度なテスト飛行が続けられます。この時、見守っている皆は手を叩いて喜び合い、勤労のなかにもささやかな幸せを感じました。反対に、直ぐに引返してくると大変がっかりしたものでした。

終戦も間近になって、本土空襲にこの付近をB29が低空で飛来することも多くなりました。断続的なサイレン(警戒警報)が鳴ると職場を離れ、飛行場を横切って野村町辺りまで一目散に走り、ブーという連続の空襲警報に変わると上空から見えないところへ身を隠しました。逃げる途中、野村付近にあった第7・8格納庫(現在は解体されてない)内を通っていた時に、低空飛行してきたB29の機銃掃射に遭いました。トタン屋根を撃ち抜く強烈な連続音(10m間隔位で穴が空いていたように思う)に“恐怖の一瞬”を経験し、今もその時の危機感は忘れ去ることは出来ません。その被害状況については箒口令により、知らされることはありませんでした。

そうしたことが多くなるにつれ、若松小学校隣の小川神社の森にも戦闘機を隠すため、大きな道路が開拓され運動場を横切って戦闘機が運ばれてきたこともありました。(このようなことは、各地で行われたように思います。)

そして、昭和20年8月15日。正午には重大な放送があるからと全員集合の命令がありました。工場内は油でコテコテなので、集められた場所は工場前の広い通路を少し行った左側の海軍航空隊第3格納庫(現在も残る高専に最も近い大きな格納庫)でした。机の上にはラジオが置かれ、100人前後が思い思いの姿勢で座って放送を待ちました。4月頃には、格納庫は戦闘



機でいっぱいでしたが、この頃は整備点検を終えると戦闘機は直ぐ戦地へ送られたのか空っぽでした。私たちはそのガラーンとした大きな格納庫の片隅で玉音放送を聞き、終戦を迎えたのでした。その放送の言葉の意味はなんとなく理解でき、日本が戦争に負けたことも分かりました。その時、子ども心にもこれからどうなるのか…。極度の心配と恐怖さで、この先真っ暗闇といった感覚であったように思います。その後、自宅の庭に一坪ほどの大きな穴を掘り、急いで書き物などとともにここで体験した思い出も一緒に燃やしました。今から65年前の学徒動員での体験です。記憶も薄れてきましたので思い違いはあろうかと思えます。しかし、鈴鹿市にもこうした歴史があったことを伝えていかなければならないと感じ、お話しをさせていただきました。

山口俊彦さんは大黒屋光太夫の研究者としても知られています。山口さんは平成4年にドイツのゲッチンゲン大学から、光太夫の描いた日本地図が鈴鹿市に里帰りすることになり、鈴鹿高専の都築先生を訪ねました。その折、たまたま校舎の3階から16歳頃に青春時代を過ごした、あの格納庫群を発見しました。すでに解体されているものとばかり思っていた格納庫が自分と一緒に生き残っていたことに本当にびっくりし、感激されたそうです。それから、格納庫への思いは一層強いものとなりました。1棟でも保存され、平和資料館などとして生き続けて欲しい、と私たちにその熱い胸の内を語ってくれました。

※山口さんの記事は8月15日(日)の中日新聞「戦跡は語る」でも取り上げられました。

私の大東亜戦争時の学徒動員の思い出 中村純伊知さん(鈴鹿市中旭が丘)

今年65回目の終戦記念日を迎えます。私も年齢が81歳となり、次第に記憶も薄らいでゆきつつありますが、戦時中の学徒動員時の思い出をたどり、下記に記しました。

私は昭和4年生まれで、白子幼稚園・白子小学校を昭和17年3月卒業、大東亜戦争の開戦が昭和16年12月8日のため中学校の学区制により、三重県立神戸中学校へ入学しました。

戦争も開戦後次第に激しさを増し、当時大本営発表の日本の連戦連勝の報道も次第に少なくなり、ミッドウェイ海戦・ソロモン沖海戦等では、日本海軍の航空母艦等が圧倒的に優勢な米軍に沈められ、帰るべき母艦を失った多くの戦闘機と優秀な操縦士とともに南海の海で失いました。

このような戦況のもと昭和19年春に学徒動員令により、私達中学3年の学徒約50名が三菱航空機鈴鹿整備工場へ動員されました。(現在の鈴鹿工専のあたりだろうと考えられます)。私達の仕事は世界で最も性能がよいといはれていた海軍の零式戦闘機の整備作業で、三菱航空機のテストパイロットが名古屋港飛行場より鈴鹿飛行場へ生産した飛行機をテストしながら運び点検整備が必要な個所を知らせてもらい1機学徒5名位で作業を行っておりました。学徒による整備は非常によく手落ち事故は全然なく海軍よりも称賛されておりました。

その後昭和19年6月15日サイパン島が米軍の大挙来襲占領され、日本内地の制空権が米軍に制圧され、1万米以上の高空を飛ぶB29には日本の戦闘機・高射砲弾も届かず、何の対抗も出来なくなりました。この時点で日本は敗れていたのですが1億総玉砕・徹底抗戦と云い国民を欺いていたと思われれます。その後神風特攻隊が編成され米軍の艦船・飛行機等に自爆攻撃を行い多くの若い軍人が命を落としました。しかしこのような戦術転換をしても戦況は悪くなるばかり、特に敗因は昭和19年12月7日東南海地震による飛行機の生産低下です。零戦1日の生産機数が25機であったのが5機以下に落ち、また昭和20年1月13日深夜の三河地震の発生で状況が悪くなったことで、鹿屋の特攻基地への供給がほとんどなくなったことです。

この間工場は爆撃とか機銃掃射をうけはじめたので滑走路南側の森の中にえんたい壕をつくり終戦まで整備をしていました。昭和20年8月15日の天皇陛下の終戦のお言葉は森の中で聞きました。やっと戦争が終わった思いましたが我々学徒が今後日本のため平和な世界を作らなければならないと思いました。



学徒動員 鈴鹿二空廠の四ヶ月 落合郁夫さん(津市下弁財町)

1945年5月、B29による空襲が激しくなる中、私たち高田中学3年生、鈴鹿の第二海軍航空廠(鈴鹿支廠)で働くことになりました。「学徒動員実施要項」に基づき「学業を停止」して軍事産業に動員されたのです。二空廠は二つの飛行場の間にあって戦闘機への補給や修理を任務とする軍直轄の施設です。全員が初年工並みの訓練を受けたあと、私は「組立」の職場に配置され、格納庫の中でゼロ戦などの脚やフラップ(補助翼)の修理に携わりました。

付き添った先生たちには発言権もなかったようで、期間中、教師の時間は1時間もありませんでした。歌にもあった「月月火水木金金」が日常で、2週間に1度の休日は親恋しさと空腹に耐えかねて土曜日の夜、家に帰り、翌日の夕食に寮に戻るとというのがやっとでした。

「赤とんぼ」とよんでいた練習機(九三式陸上中間練習機)を特攻機に仕立てるために爆装のワイヤーを取り付けたこともあります。仕事の手を止めて、みんなが特攻機を「帽振れ」で見送ったこともあります。風防を開き、白いマフラーを靡かせて、飛び立つ姿は美しくもありましたが、九州の基地で爆装した飛行機もろとも突っ込む戦法は哀しくもありました。

激務が続く中で、迎えた8月15日、炎天下で全員が聞いた「重大放送」は雑音で意味がわからず、ソ連への参戦だな、と言っていました。やがて「直心棒」の前で呆然とあらぬ方向に眼をやっている士官を見て、はじめて「敗戦」を知ったものです。夜、寮の電灯を覆っていた黒布をはずした時のなんと明るかったこと。私の14年の人生で「平和」を実感した最初の時間でした。

戦後、鈴鹿は大きく変わり、そのころの面影はほとんど偲ぶ由もありませんが、私には鈴鹿で過ごした四ヶ月のその時々思い出は、日を経つほどにますます鮮烈に蘇ってくるのです。



第二海軍航空廠
鈴鹿支廠 →



私の戦争体験 久保田孝夫さん(愛知県岩倉市)

愛知県岩倉市在住の久保田孝夫さんから、以下のメールが届きました。筆者の了解を得て、そのまま掲載します。(竹内)

戦争遺跡を保存、平和利用する市民の会 御中

昨日、朝日新聞紙上(6月19日夕刊「窓」)でNTT管理中の旧鈴鹿海軍航空隊の格納庫などを撤去し、他の公園などにする市計画に貴会の反対運動も紹介されていました。驚きました。私はいま愛知県人ですが、戦時中から戦後にかけては亀山市にすんでいたもので、旧軍隊の設備は大変貴重なものだと知っていました。私の記憶をいま思い出しています。

1. 昭和19年小学校6年生のとき学校から鈴鹿市道野あたりまで行軍(ハイキング)し、丘の上から白子海軍航空隊を見下ろすと赤トンボと呼ばれた二葉機が滑走路から飛び立つ訓練をしているのが見えました。先生の説明ではゼロ戦など貴重な航空機がもう少なくなり、練習は旧式の赤トンボがまた使われているということでした。

2. 同じころ亀山の能褒野から鈴鹿市広瀬町にかけ、北伊勢陸軍飛行場が出来ていたので小学校から見学に行きました。建物などまるでなく、農地むき出しの滑走路にゼロ戦などが無造作に置かれ、整備兵がエンジンの整備をしていました。地元小学校にベニア板製の戦闘機製作を命じられ、私の小学校も一機を製作してここへ運んだと思います。上空の米軍機の目をごまかす目的だったようですが、米軍機がこれにダメされベニヤ機を射撃したという記憶はありません。すぐ滑走路に隣接した林の中に掩体壕が掘られ、そこに貴重な航空機を隠していました。敗戦後に再び見に行ったとき航空機は無惨に破壊され、無線機などは誰かに持ち去られていました。私は樹脂製の風防ガラスを持ち帰ったのを覚えています。
3. 昭和20年春ごろ亀山の私の家の近くの田圃に鈴鹿航空隊の戦闘機が一機墜落しました。まもなく航空隊の将校がやってきて機体の中に挙手の礼をして入ったのを覚えています。
4. 鈴鹿市平田町一帯は広大な海軍工廠があり沢山の兵器や軍需物資の生産拠点でした。鈴鹿川沿いの低地から平野町の丘へ上ったところに八角形の建物があり、たぶん工員の休養設備と思いますが、全国でここしか無いものだと聞いたことがあります。これもいつの間にか消えてしまいました。
5. 昭和20年12月ごろの戦後で、私の中学は窓ガラスや床板がない土間の学校でしたが、平田町海軍工廠まで生徒が歩いていき、旭ダウになっている海軍工廠の窓ガラスや戸板を外して学校まで運搬しました。
6. 私は戦後昭和23年に平田町にあった通信省（現 NTT）鈴鹿通信講習所に入学し昭和24年4月に卒業しました。その場所と建物はのちに鈴鹿通信病院になり、結核療養所になりました。そして白子の旧海軍航空隊をそっくり NTT が訓練施設として利用することになったので、平田町から白子に生徒も設備も移転しました。
7. 私のすぐ下のクラスは白子の方でした。そのころ「雲流れる果てに」という映画のロケがあり、いま撤去が検討されている格納庫や滑走路で撮影されました。この映画に通信学園の生徒もエキストラで出演しました。生徒たちの制服はまだ海軍のものをそのまま支給着用していたので、エキストラ撮影にはまったく好適でした。生徒が二列に並んでお互いにピンタを張り合う場面のエキストラは NTT 訓練生の出演です。この映画は反戦映画として有名です。主演は鶴田浩二、木村功でした。また木製のゼロ戦を3機組み立て滑走路に並べてモーターでプロペラを回していました。このエキストラ出演料は生徒に渡されず、学園のサツマイモの夕食がはじめて赤飯として出されました。この映画は名画でいまでもDVDで鑑賞できます。
8. 私はのち NTT に入社し昭和33年に白子の電気通信学園で研修を受けました。当時まだ滑走路も鈴鹿高専側にまたがる広大なものが残っていましたが、プールや入浴設備食堂も海軍のものでした。いつの間にかどンドン姿を消してしまいました。運動場も三重県唯一の公認競技場でした。寝具は海軍の羽布団でしたし、作業着も海軍のものでした。
9. 私はこの白子の電気通信学園には3度ほど入寮して研修を受けました。覚えているのは敷地内に小高い丘があり、松林の中に碑がありましたが、敗戦を悲観して海軍航空隊の誰かが自殺したという場所でした。いまでもあるかどうか。旧海軍時代の建物のほか、NTT に引き継がれたものに貴重な消耗品類がありました。私が記憶しているのはナチスドイツから贈られた白黒映画フィルムがありそれを見ました。アーノルドファンク監督ハンネスシュナイダー主演のアルプスをスキーで縦横に滑っていた映画や、当時の大東亜省



製作のボルネオ島のキナバル峰 を登る映画もありました。また通信設備でも電鍵や通信機など貴重なものがそのままそっくり残っていましたが、いま保管されているかどうか。

10. 私が残念に思っているのは加佐登町加佐登出張所から JR 加佐登方面に向かって歩いたとき、右手の畑の端にある「HAT」と呼ばれるコンクリート建物です。これは戦前に東京から満州の首都新京まで、延々と直通の有線電話線を設置しようと計画されたもの。その通話伝送損失を補償するため巨大な線輪（荘荷線輪と云い HATと略）を一定距離に設置しました。八紘一宇という思想の残骸です。そのうち日本の松前重義博士が真空管で増幅する無荘荷ケーブル方式を発明したので、この巨大な HAT が活躍することはありませんでした。しかし、貴重な歴史遺産に違いありません。いま日本にこれが残っている場所は数カ所、静岡榛原では市の文化財指定されています。私はかつて鈴鹿市市役所の担当者にこのことを伝えました。一応現場に残っていることは把握したと返事がありましたが、これが市文化財に指定されたかどうか不明です。もし指定されてないようならぜひ保存されるようお願いしたいものです。

私の記憶は以上のようなものですが、貴重な戦争時代の財産が無為に失われることのないよう願ってやみません。

愛知県岩倉市 久保田孝夫 (1932年生まれ77才)

格納庫見学会・講演会のご案内

日時；9月20日(月)13:30～ (小雨決行)

集合場所；鈴鹿市旭が丘公民館(鈴鹿市中旭が丘3-13-30)

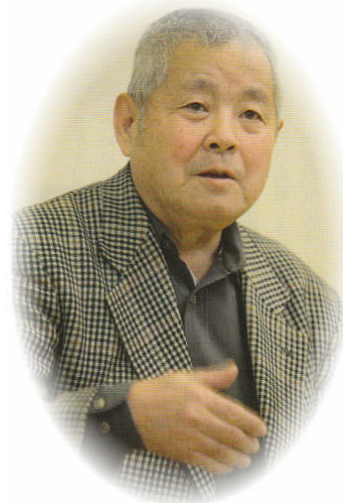
電話 059-386-5399

※駐車スペースが少ないのでなるべく乗り合わせ
をお願いします。

内容；①格納庫見学(旭が丘公民館から徒歩10分)、
②講演会及び意見交換会(旭が丘公民館ホール)

講師；増田一眞さん(構造建築家)、
演題；「壊すより活かして使う時代」

その他；参加費無料、事前申し込みは不要です。
当日、公民館前にお集まり下さい。



※増田一眞さんプロフィール…ますだ かずま、1934年広島県生まれ、構造家、建築家。

1958年、東京工業大学工学部建築学科卒業。松村組に勤務し、1961年に東京大学生産技術研究所田中尚研究室に所属。1964年に、自分の構造設計事務所を設立し活動を展開する。主な構造作品に、ICU理学本館、鎌倉雪ノ下教会、筑波第一小学校体育館、熊本機能病院、天竜原木センターなどがある。

編集後記

終戦とお盆と。8月は鎮魂の月だ。戦後65年。戦争を後世に語り継ごうと、新聞やテレビは多くの特集を組んだ。わが会のことも取り上げられた。女性会員の一人から「取り組む者の態度や視点がしっかりとゆるぎないものだからこそ、ちゃんとした記事や番組に作ってくれたんだな、と思いました」との感想メールをいただいた。(竹内)

鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会

代表 加藤二三子、竹内宏行

〒510-0254 鈴鹿市寺家1-2-47

電話 059-388-6508

メール ta818hi@mecha.ne.jp

HP <http://www006.upp.so-net.ne.jp/asao/peacesuzuka.htm>